

ふるさとの民話

20231113

第2稿

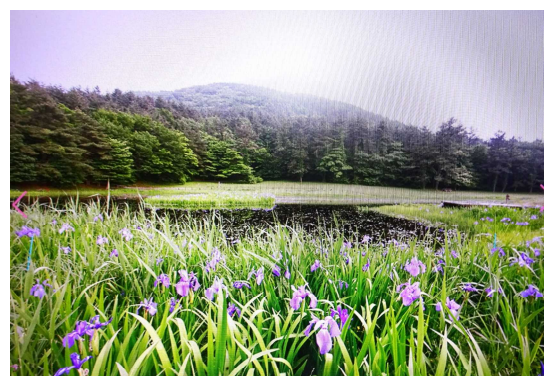
「にめのがいけ姫逃池ものがたり」第2稿

文章・洲浜昌三

スクリーンに三瓶姫逃池の風景

二胡の曲が流れる。(約15秒)

途中から音が小さくなり朗読が始まる。



朗
読

朗
読

三瓶山の北のヶ原にちようじやはら長者原という草原があります。その一角に池があります。

長さがおよそ180メートル、幅が50メートルほどの目立たない池ですが、

古くは姫野ヶ池とか姫沢の池とも呼ばれていました。今は、「姫が逃げる池」と書いて

姫逃池と呼ばれています。6月になると、この池には紫のカキツバタと白いカキツバタ

が咲きそろいます。この花には一人の美しい娘と勇気のある若者の話が伝わっています。

二胡の曲が高まる。(約8秒)FO

長者の屋敷には「お雪」という美しい娘が住んでいました。

幼いときに母を亡くしましたが、大自然の中で明るく育ちました。

あちこちからお嫁にほしいと言われましたが、

お雪には、心の中で密かに思っている若者がいました。

その若者は、山のふもとに住んでいる木樵きこりでした。

二人が出会ったのは2年前でした。

厚い雪に閉ざされた長い冬が終わり、春の光が降り注ぐ草原で、

お雪がきれいに咲いた花を摘んでいたとき、

足を滑らせて池の沼へはまり込んだのです。

あがけば足掻くほど、深みにはまっていきます。

大きな声で助けを求めても、誰もきてくれません。

気を失いかけた時、山のふもとの林の中から走ってきたのは若者でした。

若者は、そのまま池の沼の中へ飛び込み、

お雪を抱えて助け出してくれたのです。

お雪が、お礼を言って名前を聞きました

木こり

「この山のふもとに住んどの名も無あ木樵じゃ」

にっこり笑って若者は山の仕事へ帰っていきました。

お雪は、若者の勇気と優しさを忘れることができませんでした。

若者も同じでした。(静かに「草原情歌」の前奏曲が入る)

優しい山の姿を、ふもとから見上げる度に、焼き付いた娘の笑顔が

まぶたに浮かんでくるのです。

(二胡の曲約8秒)

ある日のことです。隣の野伏原のふしがはらに住んでいる山賊の頭と家来数人が

長者の屋敷へやってきました。

以前から、お雪を嫁にほしいと何度も頼んでいたのですが、お雪が、良い返事をしなかったので、力づくで奪いにきたのです。

そのことを知ったお雪の父、長者は、お雪を裏の山へ身を隠すように言いました。山賊の頭と家来たちは、大声で何度も叫びました。

山賊

「娘を出せ！どこへ隠した！ すぐに出さなきゃ、お前の首もはねるぞ！」

朗読

異様な大声は、静かな山に響き渡りました。

この日も、山で木を切っていた若者は、その声を聴くと、

鎌を持って長者の屋敷へ走っていききました。

息を切らして走ってきた若者を、山賊の家来たちがバラバラと取り囲みました。

山賊

「なんじゃやめえ、その鎌でわしらと戦うちゅうんか。ようし、やったれ！」

朗読

若者は、瞬く間に手や肩を切りつけられ、ジリジリと池の方へ追われていききました。

そして、グサツと、最後の一太刀を背中に受けて、池の中へ倒れました。

山賊

「ざまあみろ、どこの馬の骨ともわからん野郎が余計なことするからじゃ」

朗読

ひとこと言葉を池に投げつけて、(二胡の曲静かに[F1])

山賊たちは「また来るぞ」と言い残して帰っていききました。

それを見届けると、裏山に身を隠していたお雪は転ぶように出てきました。

お雪

「ああああ、なんで…なんで、あなたがこんな目に…ああああ

わたしのために、命をかけてくださったのね…やっとなあなたと一緒にになれる…

朗 読

いつまでも…いつまでも」

お雪は、若者のあとを追って池の中へ入って行きました。山のふもとの池に、幾重にも波の輪が広がっていきました。手を取り合った二人の姿は、夕日を浴びて、

美しい二輪の花のように、

静かな水面みなもに浮かんでいました。

「草原情歌」1番

スクリーン・池とカキツバタ



※色々な本に書かれた「姫逃池」の民話を参考にして、シンプルなスタイルの民話として書きました。

立体感を出し朗読劇形式で発表できるように会話を挿入しました。一人で朗読する場合には臨場感を出してうまく表現したいものです。ト書きに二胡の曲を指定していますが、バイオリンなど

弦楽器もいいでしょう。短い民話ですが、BGMが重要な役目をします。(洲浜)